氏　　名　古賀敬太（こが けいた）
学位(専攻分野)　博　士（法　学）
学位記番号　論法博第 125 号
学位授与の日付　平成 12 年 7 月 24 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目　カール・シュミットとカトリシズム
——政治的終末論の悲劇——

論文調査委員　（主査）教授 小野紀明　教授 木村雅昭　教授 初宿正典

論文内容の要旨

本論文は，第一次大戦から第三帝国の時代に至るまでのカール・シュミットの政治思想を，当時のドイツ・カトリシズムの文脈の中に位置づけて明らかにすることを主眼としている。カトリック知識人は，前世紀の自由主義や合理主義が秩序形成能力を喪失し，第一次大戦後のドイツが精神的・政治的混乱に瀕しているのを目撃して，混沌とした世界をカトリックの秩序原理によって救済しようと必死の努力を傾けたのである。シュミットもこのような知識人の一人であった。

本論文は，カール・レーヴィットやクロコウが提示した決断主義者あるいは能動的な「ニヒリスト」としてのシュミット解釈とは異なり，シュミットを「カトリック」と規定した上で，そのカトリシズムの特殊性を彼の思想の形成と展開に即して具体的に跡づけようとする。彼のカトリシズムの特殊性を規定しているのは，彼の歴史観と人間観である。シュミットは，第一次大戦の勃発に触発されて時代の危機を色濃く反映した終末論を展開したが，ヴァイマール共和国が成立する状況下でドノソ・コルテスの影響を受けて，政治的終末論を提唱するに至った。つまり彼は，内外の危機を深刻に受け止めて，終末における和解しがたい政治的対立を想定したのであるが，それは政治的なるものの本質を友一敵の対立に求める彼の政治観へと結実していくことになる。政治的終末論を展開しつつも，終末のもたらす破局を可能な限り回避ないし延期しようとするシュミットは，聖書に記された「阻める者」（カテコーン）に注目し，「カテコーン」の役割を強力な国家に求める。破局を阻止する使命を有する彼のカテコーン理論は，終末論において往々にして認められる受動的・非政治的態度を克服して，歴史的・政治的行動の原動力を提供するものであった。シュミットの歴史観と密接に関わっているのが，彼の悲観主義的な人間観である。彼は，「恩寵は自然を廃棄せず，それを完成する」というトマス・アクィナスの理性と啓示，自然と恩寵の予定調和を破壊し，人間の徹底的な腐敗と堕落を強調する。したがって彼は，近代の自然法論と同様に，カトリシズムの自然法論にも反対であった。トミズムは，激動や混乱といった表面的な事象の背後にあって変化を免れた「永遠の秩序」を想定するが，シュミットにとってそうした自然法論は，予定調和を説く自由主義と同様に，アナーキーとカオスの現実に目をふさぎ，政治的なるものの必要性を看過するものに他ならなかった。

では，このような徹底した悲観主義的人間観と政治的終末論を説くシュミットにとって，そもそも具体的な秩序形成は可能なのであろうか。既存の価値体系や政治秩序の崩壊とアナーキー状況の出現という危機の中で彼に秩序形成のモデルを提供したものは，カトリック教会である。彼は，不可謬の決断を下す教皇を中心にするカトリック教会をモデルにして国家論を展開すると同時に，政治ないし法学と神学の構造的な「類比」（「政治神学」）に基づいて，無から有を創り出す神のイメージを国家論に適用して，法治国家を斥け独裁を提唱する。しかしながら，シュミットにおいてはカトリック教会を国家のモデルとしながらもカトリシズムの倫理や規範は秩序形成においてまったく何の役割も演じていないどころか，徹底的に仮面剝奪を施されることになる。彼のカトリシズムは徹頭徹尾ノミナリスティックに理解されており，決断の内容ではなく，ただその審級が問題にされるだけである。総じてシュミットの決断主義は，主権的な神概念と自然法規範を切断する点において，トマス・アクィナスに対抗して知性に対する意志の優位を説いたドゥンス・スコトゥスやウィリアム・オッカムの神学的決断主義の衣鉢を継いでいると言える。彼がカトリシズムから継承した秩序原理は，倫理や自然法規範ではなく，まさ

しく全能の神や不可謬の教皇をイメージした独裁的権力の要請であった。勿論，憲法学者としてシュミットは，こうした要請をヴァイマール憲法の枠組みの中で巧妙かつ慎重に，しかし首尾一貫して実現しようと試みるのである。彼は，秩序形成における権力や決断のもつ意味を最大限評価した人間であったが，同時に権力が理念なくして維持できないことをも十分に認識していた。そこで登場してくるのが民族の神話であり，「同質性」（Homogenitaet）さらには「同種性」（Gleichartigkeit）の強調である。こうしてシュミットの政治神学とソレルの神話論が，緊張を孕みつつ結合することになる。本論文は，シュミットを「無からの決断」や「決断のための決断」を重視する能動的ニヒリストとして解釈する立場とは一線を画する。寧ろシュミットは，一貫して無神論，経済至上主義のボルシェヴィズム，そして中立化や脱政治化を促進する自由主義に対して戦いを挑んだのである。彼の決断は，反自由主義，反ボルシェヴィズム，反技術主義への決断である。他方，ナショナリズム，ナチズム，そして反ユダヤ主義ですらシュミットにとってはカトリシズムと矛盾するものではない。したがって彼は，第三帝国下において技術主義，アナーキー，自由主義，そしてボルシェヴィズムを克服したナチズムに関与し，その指導者原理と反ユダヤ主義を肯定したのである。シュミットのナチズムへの傾斜，その「桂冠法学者」としての活動は，シュミットのカトリシズムが極めて権威主義的であり，かつキリスト教的倫理や規範の拘束を受けていなかったことによって可能になったと言えよう。

本論文は，シュミットの政治思想の発展を内在的に追跡するとともに，デュッセルドルフ中央公文書館に保管してあるシュミットとカトリック知識人との間の厖大な書簡をも利用しつつ，同時代のカトリック神学者や知識人とシュミットとの思想的関係を「超越と内在」という観点から再構成した。本論文は，以上に述べてきたようなシュミットの思想の終末論的特質をまず明らかにし（第一章），次いでドノソ・コルテスの政治神学が彼の思想に与えた影響の程度を測定し（第二，三章），また彼の教会論の本質を解明する（第四章）。その後で具体的にシュミットと同時代のカトリック知識人との比較の作業に着手する。第一次大戦後のドイツ・カトリシズムは，「文化的ゲットー」から脱出し，積極的に現実の世界に関与し，カトリシズムの理念や秩序原理によって当時の精神的・政治的危機を克服しようと試みたが，そのプロセスの中でカトリシズムの「世俗化」という現象が生じ，それへの批判として「超越への回帰」が叫ばれることになる。その結果，「超越と内在の相克」の中でカトリック知識人は引き裂かれ，苦闘せざるをえない（第七，八章）。シュミットとカトリック文筆家フーゴー・バルは，超越か内在か，現実の世界からの訣別かそれとの和解か，時代への関与か時代からの逃走か，という根源的な問題に関してまったく対蹠的な選択を行った。シュミットが技術主義，自由主義，ボルシェヴィズムに対する批判という立場から終始一貫して現実の世界に関与するのとは対照的に，バルは禁欲を強調し，現実の世界との訣別を主張するのである（第五章）。また，カトリック文筆家ヴァルデマール・グゥリアンは，シュミットの決断主義や反自由主義に一時は心酔しながらも，やがて彼を「世俗化されたカトリシズム」の提唱者として批判し，その思想の無道徳性故に彼を「ニヒリスト」と規定するに至った（第六章）。更に，カトリックに改宗した神学者でシュミットの友人でもあったエーリック・ペーターゾンは，シュミットの政治神学や彼の世俗化した終末論を批判し，本来の終末論の立場からナチズム批判を展開したのである（第十章）。これに対してカトリック神学者のエッシュヴァイラーは，カトリシズムとナチズムの両立可能性を主張してシュミットと行動を共にしたのである（第九章）。

シュミットの歩みはまさにカトリシズムの超越から出発して，次第に内在へと比重を移し，その結果超越的立場を喪失してナショナリズムやナチズムの精神的・政治的潮流と妥協していくプロセスであった。終末の破局を押し止めようとするシュミットにとって，晩年のドノソ・コルテスのようにキリストの再臨による神の国の到来に目を注ぐ道も，バルの禁欲の道も非政治的な逃避にすぎなかった。彼は，精神的・政治的アナーキーの観を呈したドイツの現実に徹底して関わっていくが，その方法はカトリック的な自然法への訴えかけでもなければ，精霊や恩寵による人間の「再生」の模索でもなく，ひたすら国家の権威や政治的なるものの全体性を強調することに終始したのである。

論文審査の結果の要旨

ナチスの「桂冠法学者」であったカール・シュミットの思想については，既に公法学においてはもとよりのこと，政治思想史の領域においても厖大な研究の蓄積がある。シュミットがとりわけ政治思想史の上で重要な思想家として常に研究者の関心をひいてきた所以は，「ニヒリズムの革命」としてすぐれて20世紀的な政治運動であるファシズムの特質を，彼が最も

よく表現し得たと考えられてきたからである。こうした観点から従来の研究は，彼をニヒリズムに立脚する決断主義的な行動主義者として規定するものが殆どであった。本論文の画期的なところは，彼の思想の核心におよそニヒリズムとは対極に位置するカトリシズムを見出そうとする点に存する。シュミットとカトリシズムの関連を解明する企ては，今日のシュミット研究の一つの潮流をなしているが，本論文は単なる概念的考察を越えて思想家の内面に肉迫しようとする姿勢において，また同時代の多くのカトリック知識人との詳細な比較を試みている点において，類似の研究を凌駕している。

シュミットにおけるカトリシズムの問題を解明するためには，第一にカトリシズムが彼自身にとって真に本質的な意味を有していたのかを明らかにすること，第二に教会と国家の関係について長く思索を重ねてきたカトリック的政治思想と彼の政治思想との異同を測定することという，二つの作業が不可欠である。第一の問題に関しては本論文では，『国家の価値と個人の意義』，『テオドール・ドイブラーの「極光」』，『教会の可視性』といった初期に属する，それだけに彼の問題意識が割合に率直に語られている著作の丹念な読解と，彼がカトリック知識人と交わした書簡の分析を通して肯定的な解答が与えられている。第二の問題に関しては，同様にカトリシズムの立場から極めて権威主義的な国家観を提示した反動思想家ドノソ・コルテスの思想と比較することによって，著者独自の結論が導きだされる。著者によれば，両者に共通するものは反キリストの到来を阻止する「カテコーン（阻める者）」の役割を国家に期待するという態度であるが，その際にシュミットはドノソの政治思想の核心に脈打っている宗教的実存意識を払拭してしまう。その結果，国家は宗教的な価値内容や自然法的秩序の制約から実質的に解放され，教皇を筆頭とする主意主義的な命令の審級だけを教会から借りた赤裸々な暴力装置として立ち現れてくることになる。この相違を生み出したものは，シュミットがカトリックでありながら，他方でまぎれもなくニヒリズムの時代の思想家であるという事実なのであるが，著者によればそれ故にこそ彼はファシズムのイデオローグとして有効性を持ち得たのである。

しかしながら，この結論は第一の問題に著者が与えた解答とよく両立し得るであろうか。つまり実質的な価値内容を欠如し，ただその教会組織論だけを受け入れたカトリシズムを，我々はカトリシズムと呼び得るであろうか。この疑問に対しては，同時代のカトリック知識人たちとの思想的確執を描き出すことを通して著者なりの答えが用意されている。それは，価値の源泉である神の超越性とそれに由来する此岸内在的な価値秩序への信仰を喪失したシュミットのカトリシズムは，およそその名に値しないという厳しい評価である。しかし，同時に著者は，そのことは彼が個人の信仰として神の存在や摂理を否定したことを意味してはいない，と慎重に付け加えている。この点に関しては今日，カトリシズムの「代表（再現前）」概念に注目してより整合的な解釈を与えようという企ても存在するが，本論文はそうした解釈に殆ど言及していない。また公法学の分野でいえば，例えばゲルハルト・ライプホルツの「代表」概念とシュミットのそれとの関わりも検討する価値のあるテーマの一つであるように思われるが，触れられてはいない。こうした点に若干の不満は残るが，シュミットとカトリシズムの関連をその全体像にわたって解明した本論文は，シュミット研究に新しい地平を切り開くものである。

本論文ではデュッセルドルフ中央公文書館が保有しているシュミットの厖大な書簡を駆使しつつ極めて実証的な姿勢が貫かれている点も，高く評価されるべきである。著者は既に，ヴァイマール期の公法学者たちの自由主義に対する態度を検討した秀作『ヴァイマール自由主義の悲劇——岐路に立つ国法学者たち』を著している。シュミットの思想を中心に据えて改めてヴァイマール期の思想状況を解明した本論文が加わることで，わが国の20世紀ドイツ政治思想史研究が飛躍的に向上したことは疑いない。

以上の理由により，本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

なお，平成12年5月11日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。